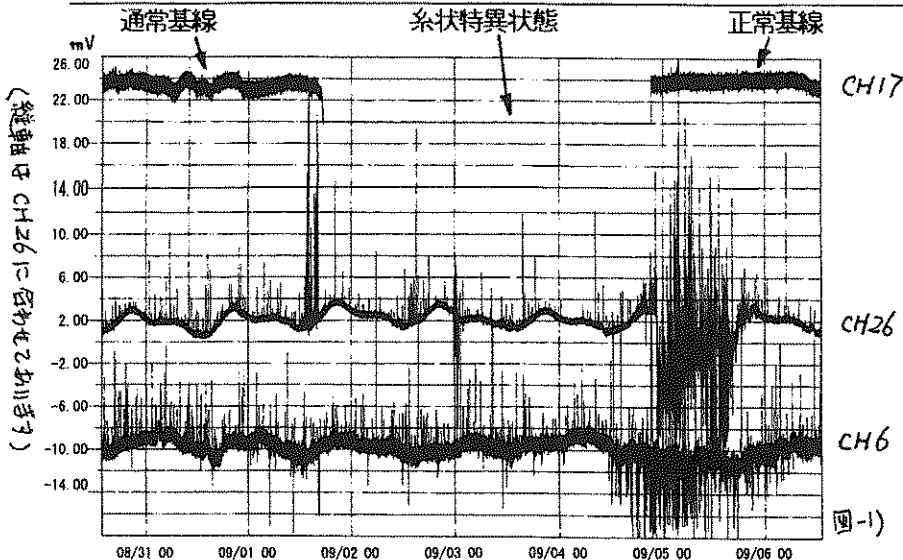


原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

No.1778 近畿圏地殻大型地震の可能性推定前兆 続報 現況報告



第5ステージが示した9月5日に極大認識
第6ステージに突入認識

2008年07月から5年以上の長期に渡って前兆が段階的变化をしながら継続する特殊前兆の続報です。

本年4月より第5ステージ前兆群と認識しておりました。その第5ステージ前兆群の前兆時間的变化から、複数極大各々に関連する前兆の初現～極大の関係から、 $T_{\text{fap}}:T_{\text{map}}=20:13$ 経験則を使用して、9月5日～6日±時期が計算されていました。

9月2日の時点で、CH16,21の特異状態が継続していた他、新たにCH17の基線が糸状態となる特異状態が、9/1より出現したため、第5ステージが示す9月5日±は対応地震発生時期ではなく、第6ステージに移行することが考えられたため、9月5日±発生の可能性は否定致しました。

左上図-1)は、8/30午後～9/6午後現在までのCH6, CH26, CH17の実際の観測基線の様子です。一番上のCH17基線が、9/1夕刻より糸状態の特異となり、9/4深夜に通常基線に復帰した様子が見えます。その直後からCH6, CH26に特異状態が出現しています。特異状態は、通常の典型的な地震前兆である、基線がワネルBF・PBF変動や、基線幅が増大するBT前兆変動とは違い、基線に不規則な変動が弱く出現する — Type III 基線が激しく変動する — Type II 基線の振動が無くなり糸状態となる — Type I に分けられる特異な地震前兆変動です。前兆レベルとしては、Type I > Type III でIが強い。

図-1)のCH6, CH26はType II認識。CH17はType I特異と認識されます。他にType IIIの特異状態が出現していたCH16が9/5のみにType IIに特異レベルの上昇が認められました。

このことから、9/5が極大認識されます。第6ステージ前兆群に移行したと認識されます。第6ステージは、現状複数観測装置による極大9/5と認識されます。仮に図-2)に示す様にCH08の特異出現開始8/20を、9/5極大に対応させ $T_{\text{fap}}:T_{\text{map}}=20:13$ 経験則で計算しますと、10/5±時期が計算されます。この認識が仮に正しい場合は、今月27～28日頃に前兆が静穏化して、静穏期に入ることが確認できる筈です。今後、更に極大が観測されるか、現状認識が果して正しいのか否か等は今後の観測データを解析しないと判断ができません。あくまでも参考です。今後を観測して、更に続報予定です。

Copyright 2013 YSBO 八ヶ岳南麓天文台

